日本医史学雑誌　第63巻第3号（2017）　315–320

黒川文哲と西南戦争

黒川　達郎

黒川醫院

1. はじめに

来年2018年は明治維新から数えて150年めになる．NHK大河ドラマも西郷隆盛が主人公の『西郷（せご）どん』に決定したそうである．たまたま筆者は西郷隆盛と大久保利通を題材にした司馬遼太郎原作『翔ぶが如く』全4巻を読破した直後でもあり，西郷隆盛の人物像に多大な関心を持っている．

一方で筆者の実家黒川家は大分県竹田市に十二代続く医家（表1）[1]であり，筆者は黒川家の歴史をまとめる作業を一昨年から続けている．その中で九代目の黒川文哲が西南戦争にかかわりがあることを知り，大きな興味を持った．

その内容を簡潔に言えば，文哲の居住地でもあった豊後竹田が西郷隆盛率いる西郷軍と政府軍の争いの戦場となり（図1）[2]，文哲は政府軍側について傷病兵の治療にあたったということである．この機会に「黒川文哲と西南戦争」というテーマで事蹟を整理してまとめることにした．

2. 西南戦争の概略（年表1）

西南戦争とは何かを簡潔に説明するために，デジタル大辞泉の解説を引用する．「明治10年（1877），西郷隆盛らが鹿児島で起こした反乱．征韓論に敗れて帰郷した西郷が，士族組織として私学校を結成．政府との対立がしだいに高まり，ついに私学校生徒らが西郷を擁して挙兵し，現在の熊本県・宮崎県・大分県・鹿児島県が戦場となっ

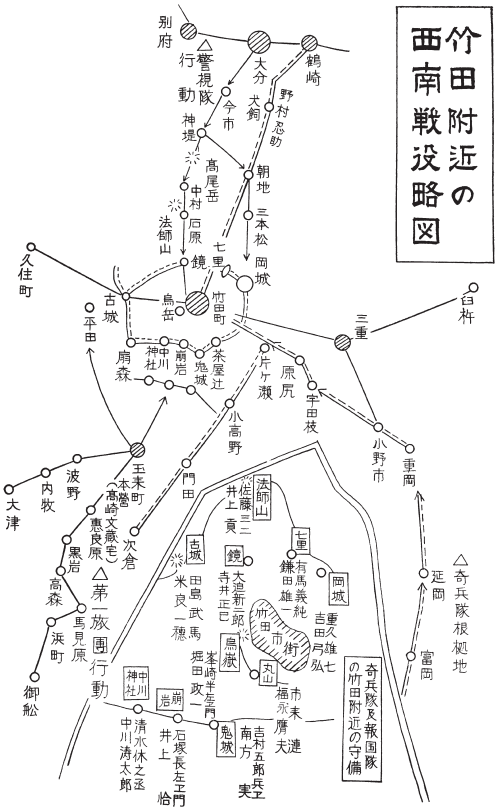

図1　竹田附近の西南戦役略図（参考図書2より引用）

表1　医家としての黒川家12代（参考図書1より引用）　※養子

1代：	黒川	周益	～1738	※7代：	黒川	周益	～1844
※2代：	黒川	元雪	～1754	※8代：	黒川	周益	1818～1887
3代：	黒川	玄益	～1767	9代：	黒川	文哲	1848～1916
※4代：	黒川	良益	～1789	10代：	黒川	健士	1880～1946
※5代：	黒川	三折	～1795	11代：	黒川	桂郎	1925～2005
※6代：	黒川	周治	～1809	12代：	黒川	達郎	1955～

年表1　西南戦争の年表

1877年　明治10年	
1月11日	東京警視庁を廃止する
1月30日	鹿児島私学校生徒ら陸軍火薬庫を襲撃して武器弾薬を奪う
2月15日	西郷隆盛らの本隊（1・2番隊）鹿児島を出発する
2月19日	熊本鎮台のある熊本城で火災があり，天守閣などが炎上，城下も延焼する
2月22日	西郷軍，熊本城を包囲．夜半小倉第14連隊と西郷軍の一部が衝突
2月28日	阿蘇地方で大規模な一揆が発生する
3月3日	政府軍，田原坂方面の西郷軍へ攻撃を開始
3月11日	政府軍第2旅団，田原坂総攻撃を行うも，失敗に終わる
3月20日	政府軍，田原坂を制圧．西郷軍を熊本まで後退
3月31日	増田宗太郎ら大分県で挙兵し，中津支庁などを襲撃
4月1日	増田ら蜂起軍，大分県庁を襲撃するも失敗に終わる
4月4日	政府，壮兵1万人を募集
4月13日	西郷軍，熊本から退却を始める
4月14日	黒田清隆の率いる政府軍第1・第2旅団が，熊本城に入る
4月15日	西郷軍の全軍が退却を始める
4月28日	西郷隆盛ら西郷軍幹部が人吉に到着
4月	西郷軍，戦費調達のため，西郷札を発行
5月1日	佐野常民と大給恒，博愛社を設立し，西南戦争の負傷者を敵味方の区別なく治療
5月20日	豊後竹田で西郷軍と政府軍とが交戦
5月21日	桐野利秋，宮崎支庁長に支援を要請
5月22日	政府，第十五銀行に西南戦争戦費を借り入れる
5月29日	西郷軍，豊後竹田から敗走
5月29日	西郷隆盛，人吉を去り日向へ向かう
7月29日	西郷隆盛，宮崎を去り北上する
8月11日	西郷隆盛，延岡を密かに離れる
8月16日	西郷軍に解散令が出され，半数が降伏する
8月28日	西郷軍，小林に至る
9月1日	西郷軍兵役370人が急襲して鹿児島城山に入る
9月8日	山県有朋，鹿児島に入る
9月22日	河野主一郎と山野田一輔，西郷隆盛の助命を求めるため，政府軍の陣地へ赴き収監される
9月24日	政府軍の総攻撃が始まり，西郷隆盛は自刃し，城山も陥落して西南戦争は終結する

た．明治初期に起こった一連の士族反乱の中でも最大規模のもので，日本国内で最後の内戦である．」とある．

日本では西南戦争が政府軍の勝利に終わった結果，明治政府の権力基盤は確立され，現在の日本の国の形を作る礎となり，他面自由民権運動は武力闘争にかえて，組織と言論を通じて民衆に働きかける方向に転じた．

その戦争に至る要因となる背景には多くの因子がかかわっているが，本稿の主題ではないので省略する．

3. 黒川文哲の概略（年表2）

黒川文哲（写真1）[3] は黒川家九代目の医師であり，医療面のみならず文化，政治，教育，事業など多方面にわたる活躍から十代目黒川健士と共に黒川家中興の祖と呼ばれる．24歳で熊本古城医学校に入学し，そこでオランダ医師マンスフェルト（写真2）[4] に師事した．マンスフェルトはオランダの予備海軍軍医で，長崎，熊本，京都で日本人に医学を教えた．熊本では1871年から3年間医学を教えているが，北里柴三郎もこのときの教え子の一人である．文哲は25歳で医業を竹田町代官町に開き，29歳のとき西南戦争に遭遇して

年表 2　黒川文哲の年表

嘉永元年（1848）11 月 3 日	父正章の嫡男として生まれる
文久 2 年 2 月 26 日	由学館出席目安高に付御賞目録唐紙
元治元年（1864）9 月 3 日	初目見 17 歳，外科医佐久間純徳に師事す
明治元年（1868）12 月 13 日	外科医修行の為上京仰付らる
明治 2 年（1869）4 月	東京に着き野原桂吾と共に双葉町御屋敷に入る
同月	市中取締のため進栄隊に入る
同年 6 月	伊東方正医師に入門
同月	下谷病院教師英人ウリスの門下生となる
明治 3 年 5 月 2 日	田島喜惣次女幸子と結婚す
明治 3 年月日欠	日出の宇都宮健哉医師の門を叩く
明治 4 年 3 月 12 日	医学寮入塾，授読を兼任役給三石六斗
同年 4 月 10 日	薬室掌事兼務被命
同月	医学寮御改革に付御免
明治 5 年（1872）	熊本古城医学校に入学，オランダ医師マンスフェルトに師事す
明治 6 年	医業を代官町に開く
明治 7 年月日欠	医祖祭挙行
明治 10 年（1877）5 月	西南の役　官軍の雇軍医になり，傷病兵の治療
同年同月	七里米倉の囚人監獄医となる
明治 22 年（1889）2 月	直入郡教育衛生会長
明治 23 年	直入郡医師会副会長
明治 24 年 3 月 27 日	直入郡会議員当選以下 44 年まで郡会議長
明治 25 年 4 月 1 日	直入郡医師会長
明治 28 年 4 月 25 日	町会議員当選
明治 30 年 9 月	県会議員当選副議長に推さる
明治 31 年	県立竹田中学校誘致に成功す
明治 32 年	竹田水田会社創立監査役となる
明治 35 年	豊陽育英会を組織す
明治 40 年	医師法制定により郡医師会の会長となる
明治 42 年（1909）5 月	私立竹田文庫設立.（竹田市立図書館の前身）文庫長
明治 43 年	鉄道院総裁後藤新平氏を坂梨に迎え，鉄道期成同盟会を組織す
大正 4 年 11 月 10 日	地方功労者として大礼記念章を受く
大正 5 年 11 月 4 日	逝去　享年 69 歳

いる.

文哲は晩年，教育，衛生等の分野で活躍し，『大分県偉人伝』[5] には，「然れども其の畢生の功績は，寧ろ醫にあらずして公共事業にあり．就中社会教化の啓発に存したりき」とある.

4. 竹田が戦場になった過程[2,6,7]

西南戦争により，竹田では焼失家屋 1500 戸余り，両軍の戦死者 213 人，負傷者 400 人以上という大変な犠牲を払った．竹田の人たちにとって，率直に言えばこの戦いは迷惑なことであり，巻き込まれた形で，敵味方に別れて大きな負担を強いられることになった.

その過程を整理すると，不平士族の感情を代弁して 1877 年 2 月に西郷隆盛らの本隊が鹿児島を出発し，熊本城にある熊本鎮台を強襲したが，谷干城以下の守兵は懸命に防御した．西郷軍は熊本城を包囲したが，このときに政府軍である小倉第 14 連隊と衝突した.

一方阿蘇地方で政府に不満を持つ民衆による大規模な一揆が発生ししたため，政府は危機感を募らせ，3 月になって田原坂方面の西郷軍へ攻撃を開始した．西郷軍側のうち鹿児島以外から参戦したものを党薩諸隊という.

他方大分県中津の福沢諭吉の再従弟で維新後自由民権運動にも参加した増田宗太郎らは大分県で

写真1　黒川文哲の肖像写真（参考図書3より引用）

写真2　マンスフェルトの肖像写真（参考図書4より引用）

挙兵した．司馬遼太郎も著書で引用した「一日先生に接すれば一日の愛があり，三日接すれば三日の愛がある」[2]と西郷のことを評した言葉は増田の言葉である．

この非常事態に政府首脳として東京にあった黒田清隆は3月に征討参軍に任命され，交戦をはじめ，4月に熊本城に入った．一方で5月に佐野常民は赤十字社のもとになる博愛社を設立している．

西郷軍側は4月下旬，部隊名を改め，山鹿・肥後大津方面担当の諸隊を奇兵隊と称し，もと中隊長野村忍介が指揮長になった．野村はかねて政府軍の後方攪乱を謀るため，豊後方面に進出することを主張していたが，それを西郷本営が認め，奇兵隊，中津隊は延岡方面に向かって4月末に江代を出発した．5月10日四中隊が豊後竹田を目指して，富高新町をたった．続いて11日にさらに四中隊が竹田に出発した．

野村は奇兵隊の総本営を延岡に置き，ここに弾薬製造所を設けた．竹田進撃以前に，西郷軍と竹田士族の間に何らかの連絡があった．野村らの合作である「西南戦記」に4月末に挙兵の約束があった記述がある．

竹田に進出した奇兵隊は十中隊，竹田報国隊六百人，大砲隊二百人で，総兵数二千五百人くらいと思われる．竹田の報国隊とは党薩諸隊の中で一番最後に結成されたものである．

西郷軍来襲の報に大分県庁は大騒ぎとなり，熊本鎮台へ出兵の要請がなされた．

これにより鎮台の二大隊（約千五百人）が5月17日に竹田に到着．5月20日，竹田で政府軍と西郷軍が交戦し，政府軍が勝利する．これに対し政府軍はさらに5月25日，徴募警視隊九百名が投入され，26日には残りの熊本の鎮台兵がすべて竹田に向かった．5月29日，西郷軍は竹田から敗走する．

5. 政府軍側についた黒川文哲（黒川家のこと）

『黒川文哲先生伝』[3]には「明治十年の二月に西南の役が起こった．五月には我竹田市にも戦雲がみなぎった．当時の政局は混沌として人々はその去就に迷った．しかし竹田の人々は大西郷の威徳を崇めて薩軍に好感を寄せていた．したがって旧士族の人々は報国隊を編成してこれに呼応した．勿論多くの医師の人々は報国隊に加担してその野戦病院の治療に従事したのである．しかし文哲先生は大義名分を重んじて，報国隊病院の奉仕を拒み，同志の久保敬徳，谷川潮庵と僅か三人で政府軍に従って軍医を志願し，多くの医友と敵味方に

別れて救護に奔走した.」とある.

竹田の同じ医師仲間で敵味方に別れて戦う事態になったが，当然のことながらお互いに憎しみの感情はなく，むしろ相手側を気遣うものが多くみられた.

6. 反骨の家系，黒川家[1)]

文哲が政府軍側についた理由の一つに黒川家の人々に伝わる気質も挙げられるかもしれない．黒川家の先祖は広島藩福島正則の重臣井川助兵衛であり，徳川二代将軍秀忠により，広島藩が改易されると福島は安芸・備後50万石は没収され，信濃国と越後国の4万5千石に減転封され，井川は浪人となった.

その結果，井川助兵衛は遠く豊後岡藩（現在の大分県竹田市）家老中川玄蕃の槍術指南として雇われ，その孫の代の三男が医師となったのが，医家としての黒川家の始まりでる．筆者の叔父黒川英次の話では戦前は座敷に古びた槍があったそうである．昭和21年の火事で焼失したものと思われる.

そのせいか黒川家は家風として権力に逆らうという気質がある．亡父十一代黒川桂郎は生前「黒川の血筋は野党である」とまだ医学生である筆者に強い口調で言ったことがある．筆者も色濃くその気質を受け継いでいて，権力者に寄り添うよりも逆らう気質がある.

また叔母万千代は女性として九州で初めて東京大学に進学し，当時の新聞にも掲載されたそうであるが，教師が授業中につまらないことを言うと睨みつけたという逸話が残っている.

文哲はもし西郷軍が劣勢であればそちらについた可能性もある.

7. 傷病兵治療時のエピソード

『黒川文哲先生伝』[3)]には次のようなエピソードが記載されている.「さて，後日文哲先生語って曰く，当時の戦傷病兵の治療は言語に絶するものがあった．毎日数十人を担ぎ込まれ，収容するのは小学校の薄暗き教室であった．ホータイの布もなく，神社奉納の新しい旗を徴発して使用する．消毒液もなく，もちろん食事に際しては手を洗うの余暇などなく止むを得ず炊婦に両手を差出し，その甲に握り飯をのせてもらって喰う有様であった．特に賊軍抜刀隊[5)]」による負傷には手を焼いたとの述懐であった.」

文哲は敵味方に関係なく治療を行ったが，特に抜刀隊は政府軍側で剣術が強いものを抜擢して編成された部隊であるので，傷も深かったそうである．抜刀隊は西郷軍が士族出身者が多いのに対し，政府軍側は農民出身者が多く，白兵戦では西郷軍に部がよかったために編成されたものである.

8. 終戦後の治療[2,3)]

西郷軍は敗戦後，賊軍と呼ばれ，5月30日西郷軍が敗走した後は，七里米倉跡が賊軍の囚人の収容所となったが，黒川文哲はその臨時刑務所の医師として無給で，患者の診療に多年に亘って奉仕している.

終戦後平穏になってからも赤貧者からは医薬料を免除するなど仁術を施している.

9. 終わりに

西南戦争は日本が近代国家に脱皮するために経験した悲しい歴史である．特に明治維新の最大の功労者の一人である西郷隆盛が非業の死を遂げたことは，現代を生きる我々にとっても，まさに痛恨の極みである.

西南戦争で無二の親友，盟友である西郷隆盛と大久保利通が敵味方に別れて戦ったが，このような例は枚挙に暇ないことで，巻き込まれた形の竹田の人々も敵味方に別れて戦わなければならなかった.

このときの心情を表すものとして，囚人の扱いを受けることになった中川祷太郎が黒川文哲に送った書面がある（図2）[1)].

不幸というしかない時代であるが，西郷軍にしろ政府軍にしろ，当時の日本人が国を思う気持ちによる尊い犠牲のもとに，我々現代を生きる日本人の基盤があることを忘れてはなるまい.

三〇　中川濤太郎より黒川文哲に送った書面

山形の監獄に服役した報国隊の人は、中川濤太郎と福永膺夫の二名であった。中川は壱等役として優遇され、福永は弐等役附の待遇をうけていた。ところが福永は悪性の疫病で不幸死亡した。左の書面は中川が同郷出身の福永を、異郷の空で看病した切々の情をめた便りである。

御平安奉大悦候。扨福永君事七月中旬頃より、疫病之処、医官も厚く注意あり、国事犯之者共何れも心を尽して看病有之、尚又小生儀は昼夜付添居而介抱に、聊怠なく手を尽し候へども、極々の悪症にて聊も、快方に不向次第に病労、五六日前より空言（譫語）已に有之候処、昨十日午前十時頃遂に御死去、残念千万何とも申上様も無之次第、福永家御老母様始め、さどさど御愁傷奉恐察如何にも、御気之毒之事に御座候。此元延応寺と申寺の境内に埋葬候。尚追々石塔にても相建て、永く寺に頼置く様致度き含に御座候右等之義は尊慮も可御在に付御申越被下度候。扨又御同人所持品並御仕送り金の義も、不日取調之上、又々可申上候。前文之次第福永家へ程能く、御申述被下度、此段尊君へ及御依頼候間、可然奉願候、草々不備

明治十一年八月十一日　　中川濤太郎

大分県六大区一小区
黒川文哲殿

—213—

図2　中川寿太郎が黒川文哲に送った手紙（参考図書2より引用）

参考図書・参考文献

1）黒川達郎『黒川家の人々（1）』日本漢方交流会雑誌「玉函」．2016.
2）北村清士『西南戦争血涙史』非売品．1965.
3）北村清士『黒川文哲先生伝』1969.
4）堀憲昭『マンスフェルトが見た長崎・熊本』長崎文献社．2012.
5）大分県教育会『大分県偉人伝』1935.
6）山口茂『知られざる西南戦争』鳥影社．2001.
7）高橋信武『西南戦争之記録第4号』西南戦争を記録する会．2008.